如シ、晝ハ目ハ開ケドモ、物ヲ見ルコト能ハズ、樹間ニ睡ル、夜ハ甚ダ明ニシテ鳥鼠ヲ捉リ、蚤蝨ヲモ拾フ、一種コノハヅクハ、形小ニシテ伯勞ノ大サアリ、是鵂鶹ナリ、一名角鴟訓蒙字會

〔食物和歌本草六〕木兎（ミミヅク）

みゝづくの骨は眩暈の藥也くろやきにして酒でのむ也

〔飼鳥必用下〕木兎

此鳥秋渡る鳥なり、但し日光山よりも澤山に來る、勿論大小有、毛色いろ〳〵有、秋頃づく引とて、是にて小鳥を取る事、人々玄る處也、餌飼鳥の肉を喰、後すり餌につける也、

青葉づく

此鳥も秋渡る也、地に而もとれる也、尤耳はなし、總羽黑し、腹に柿の府あり、目は玄んちうの色也、づく引には一向役に立ざるもの也、

〔日本書紀十一仁德〕元年正月、大鷦鷯尊卽天皇位、○中略初天皇生日、木菟入于產殿、明旦譽田天皇○應神喚大臣武內宿禰語之曰、是何瑞也、大臣對言、吉祥也、復當昨日臣妻產時、鷦鷯入于產屋、是亦異焉、爰天皇曰、今朕之子與大臣之子同日共產、兼有瑞、是天之表焉、以爲取其鳥名各相易名子爲後葉之契也、則取鷦鷯名以名太子、曰大鷦鷯皇子、取木菟名號大臣之子、曰木菟宿禰、

〔土御門院御集〕鳥名十首

足引の山深くすむみゝづくは世のうき事をきかじとや思ふ

〔就狩詞少々覺悟之事〕一射まじき鳥の事、○中略梟、木兎、

〔田舍莊子上〕木兎の自得

鷹木兎に謂て云、汝を見るに、其形おかしげにして、丸きつらにちいさき嘴あり、頭巾（キン）、鈴懸を著せたらんには、小人島の天狗など共云つべし、大きなる眼有ながら、晝はあきめくらにして、日輪を